

◆ 今週のコメント

- ・ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告が1例(女性, 50歳代)あります。本年の累積報告数は3例となっています。推定感染地域は国内で, 推定感染原因は接触感染です。本疾患は, 未だその発生機序が明らかになっていないことから, 届出された場合に菌株の提供及び調査票等の記入を依頼することがありますので, ご協力をお願いいたします。
- ・ 侵襲性肺炎球菌感染症の報告が1例(女児, 5歳未満)あります。平成25年4月1日に五類感染症に追加されて以降, 昨年は15例の報告があり, 本年は第28週までに27例の届出がありました。年齢階級別にみると, 5歳未満 7例, 30歳代 1例, 60歳代 6例, 70歳代 6例, 80歳代 6例, 90歳代 1例となっており, 5歳未満の小児と60歳以上の高齢者に多く発症しています。ワクチンによる予防が重要となります。
- ・ 咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.59(24例)で, 横ばい状態が続いており, 過去5年平均値を大きく上回る状態も続いています。例年, 6月頃から徐々に増加しはじめ, 7～8月に流行のピークを迎えますが, 昨年は12月頃にも大きな流行がありました。プールの時期に入り, さらに増加する可能性がありますので, 今後の発生動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は3.80(156例)で, 前週 2.98(122例)に比べ約1.3倍になっており, 本年で最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 五類: 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 3例】
- ・ 五類: 侵襲性肺炎球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 27例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

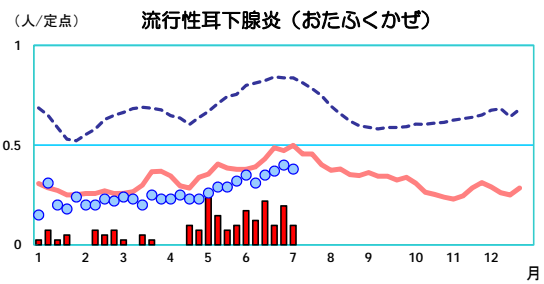
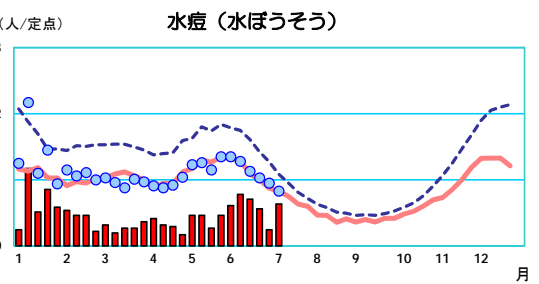
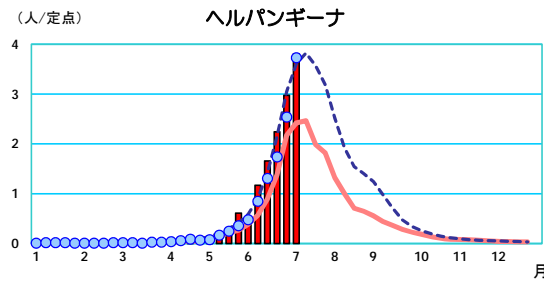
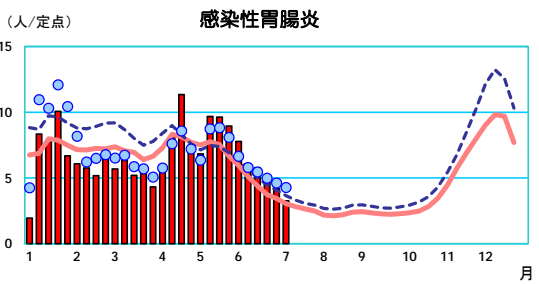
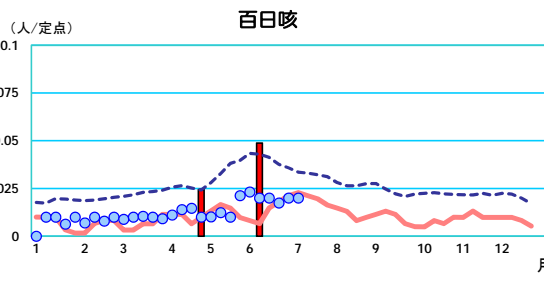
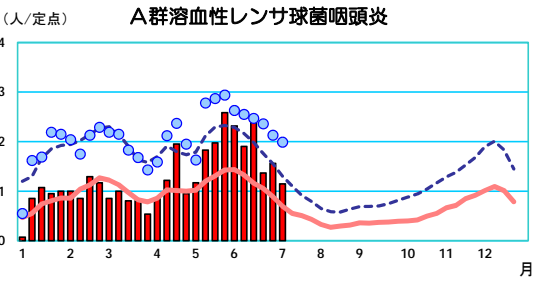
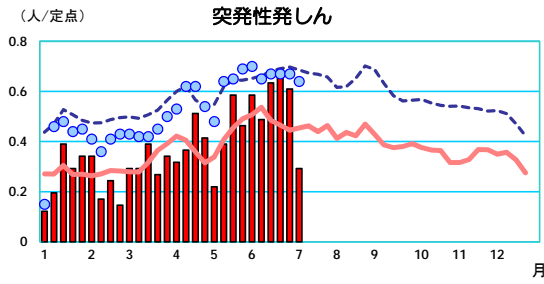
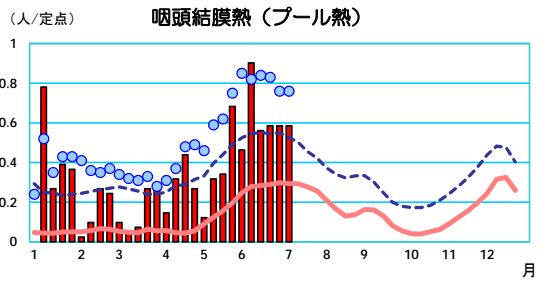
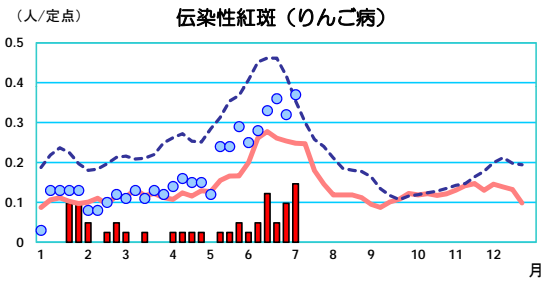
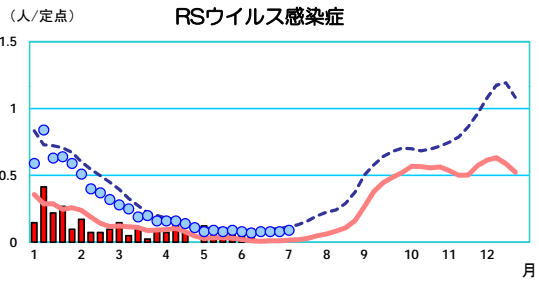
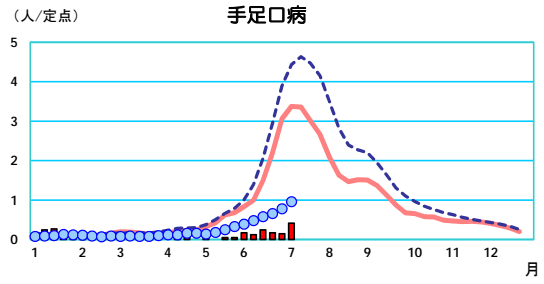
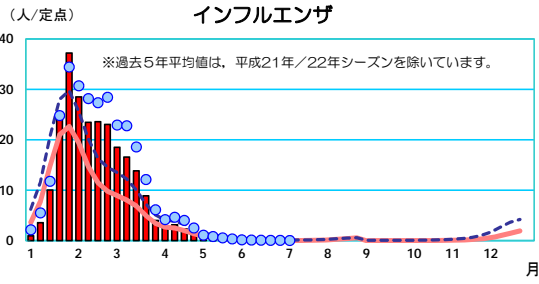
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.09	6
小児科 (降順5位まで)	① ヘルパンギーナ	3.80	156
	② 感染性胃腸炎	3.27	134
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.15	47
	④ 水痘	0.63	26
	⑤ 咽頭結膜熱	0.59	24
眼科	流行性角結膜炎	2.20	22

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

(注) 京都市のデータは, 平成26年7月17日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



第28週(7月7日～7月13日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は3.80(156例)で、前週 2.98(122例)に比べ約1.3倍になっており、本年度で最も多い報告数となっています。第20週(5月12日～5月18日)以降、9週連続で過去5年平均値を上回る状態が続いており、例年に比べ報告数が多い傾向にあります。ヘルパンギーナは流行の季節性が明確で、毎年7月を中心として6～8月に増加します。

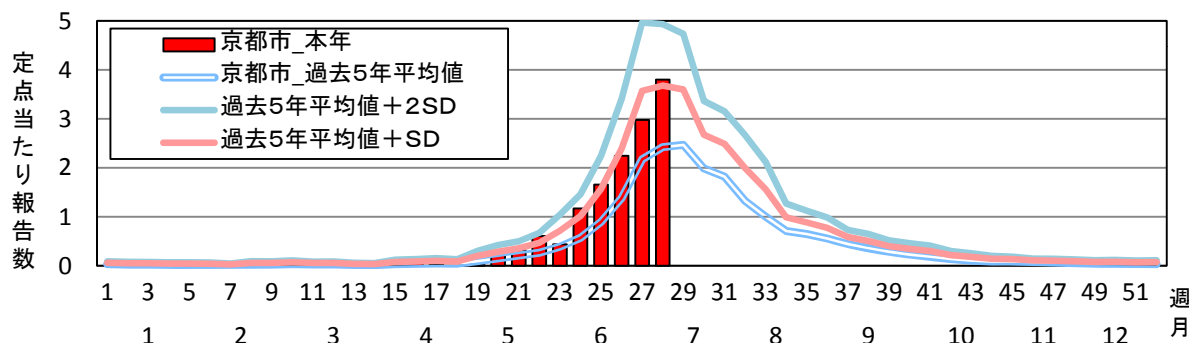
年齢階級別では、1歳が47例(30.1%)で最も多く、次いで2歳 29例(18.6%)、4歳 21例(13.5%)となっており、4歳以下の小児が85.9%を占めています。

都道府県別では、47都道府県中40都道府県で前週より増加しています。鳥取県(8.00)、東京都(7.13)に次いで、近畿でも大阪府(7.04)、奈良県(6.21)において、警報開始基準値(*)『6.0』を超えています。今後の発生動向にご注意ください。

この疾患は、感染者の鼻汁や咳などの飛沫によって感染したり、便などに排出されたウイルスが手指を介して感染するので、予防にはうがいと十分な手洗いの励行が重要となります。

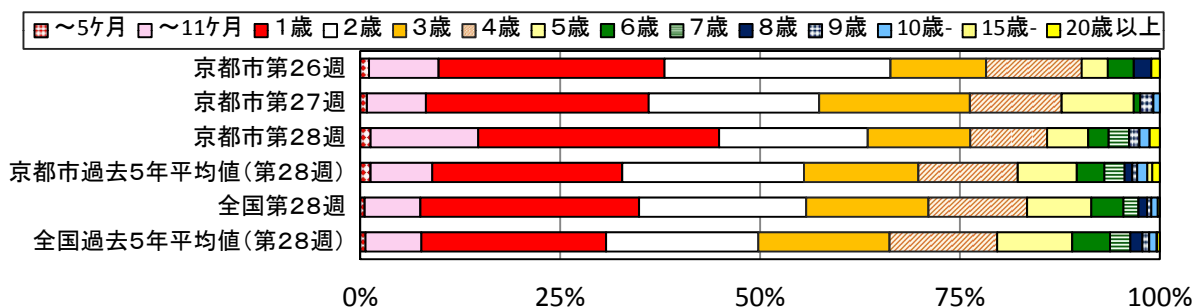
(*)警報開始基準値とは、大きな流行が発生または継続しつつあると疑われることを意味し、国立感染症研究所感染症疫学センターがこれまでの感染症発生動向調査データから基準値を定めています。

本市の定点当たり報告数の推移



※SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大さを示す尺度です。上のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がブルーのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間で比較してかなり多いことを意味しています。

年齢階級別定点当たり報告数の推移



都道府県別定点当たり報告数の推移

